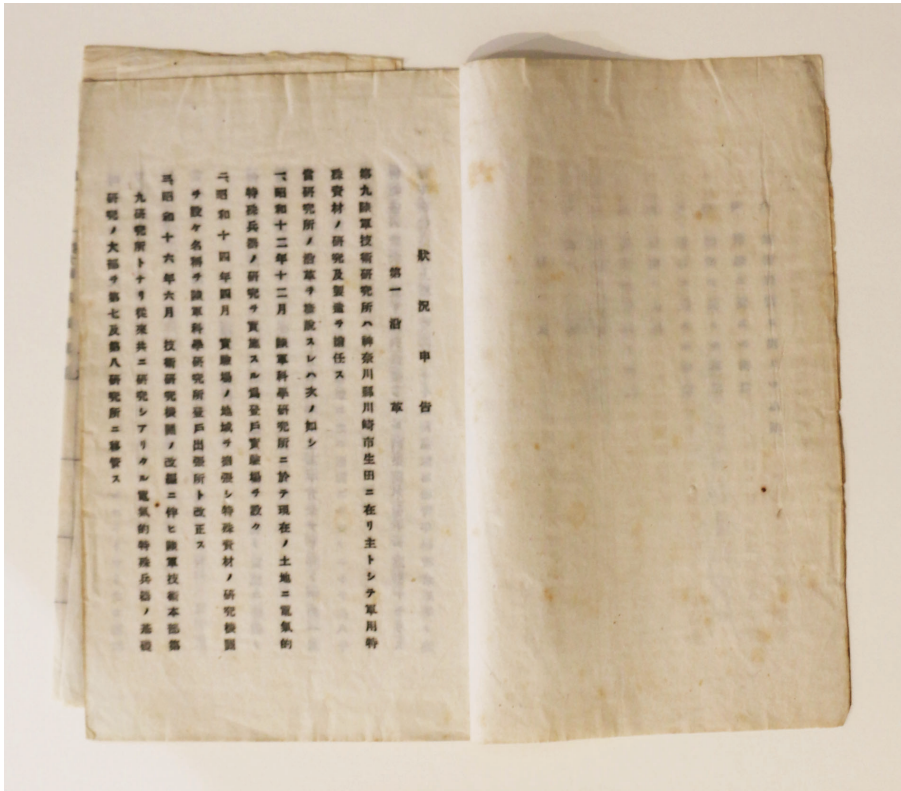
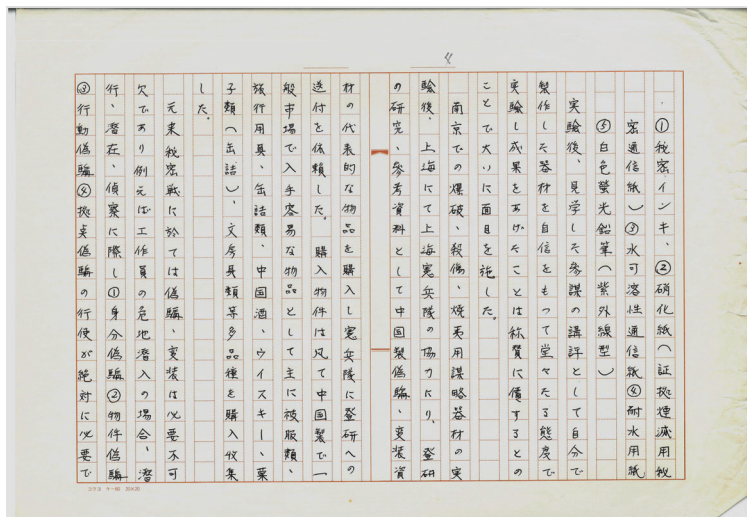
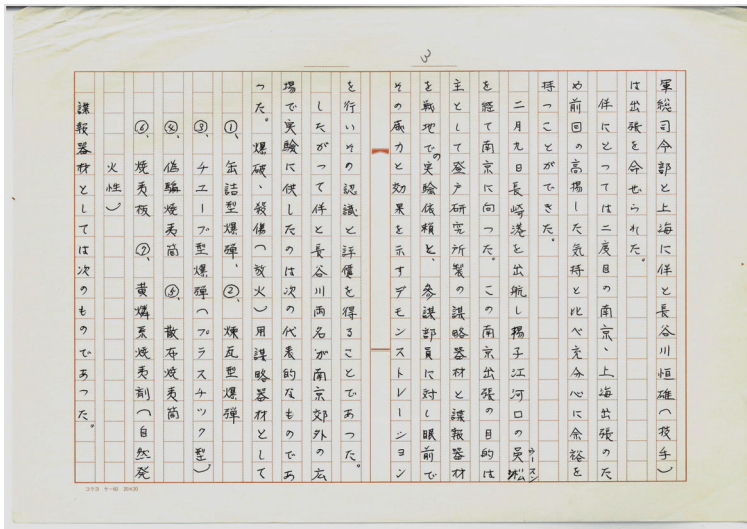


第1章 日中全面戦争と登戸研究所



状況申告原本
 (資料館所蔵 / 作成者不詳
 (登戸研究所幹部か))

沿革によれば、1941 (昭和16) 年頃からの組織の拡大とともに登戸研究所の性質が変わったことを明示している。



『陸軍登戸研究所の真実』原稿 (複製)
 (原本所蔵：当館 / 複製：当館 / 作成者：伴 繁雄 他)

昭和15年3~4月にかけて南京と上海における戦地での登戸研究所製謀略兵器・資材の実験とデモンストラーションのため、伴らが出張に行った際のことが書かれている。

第1章 日中全面戦争と登戸研究所

極秘

昭和十七年度所要経費配当表

陸軍技術本部
昭和十七年

部所別	直接研究費	人件費	特 技 研 究 費	研 究 費 計	一 般 旅 費	特 技 旅 費	旅 費 計
總務部	2,700,000	2,400,000		5,100,000	2,000		5,100,000
第一部	1,800,000	1,000,000		2,800,000	2,000		2,800,000
第二部	1,100,000	1,100,000		2,200,000	2,000		2,200,000
第三部	2,200,000	1,000,000		3,200,000	6,000		3,200,000
第一研	1,200,000	4,000,000	1,400,000	6,600,000	7,000	7,000	6,600,000
第二研	2,500,000	10,000,000		12,500,000	17,000	17,000	12,500,000
第三研	1,200,000	14,000,000	1,400,000	16,600,000	17,000	17,000	16,600,000
第四研	2,400,000	11,000,000	3,200,000	16,600,000	17,000	17,000	16,600,000
第五研	2,400,000	11,000,000	1,000,000	14,400,000	17,000	17,000	14,400,000
第六研	2,200,000	11,000,000		13,200,000	16,000	16,000	13,200,000
第七研	2,000,000	14,000,000	1,400,000	17,400,000	17,000	17,000	17,400,000
第八研	2,000,000	10,000,000		12,000,000	10,000	10,000	12,000,000
登戸	2,500,000	10,000,000	1,400,000	13,900,000	1,000,000	1,000,000	13,900,000
合計	18,500,000	54,700,000	11,200,000	84,400,000	23,500,000	100,000	84,400,000

備考

- 一 大臣命令ニ依ル旅費ハ本表外トシ別ニ申請達ヲ受クルモノトス
- 二 登戸出張所人件費ハ特技経費中ヨリ支弁シ製造関係経費ハ本表外トス
- 三 囑託研究費及北滿試験並ニ地試験ニ要スル兵器費、旅費共ニ本配当ニ包含ス
- 四 本部豫備ハ兵器費五〇万圓、旅費四万五千圓トシ本表外トス

0080

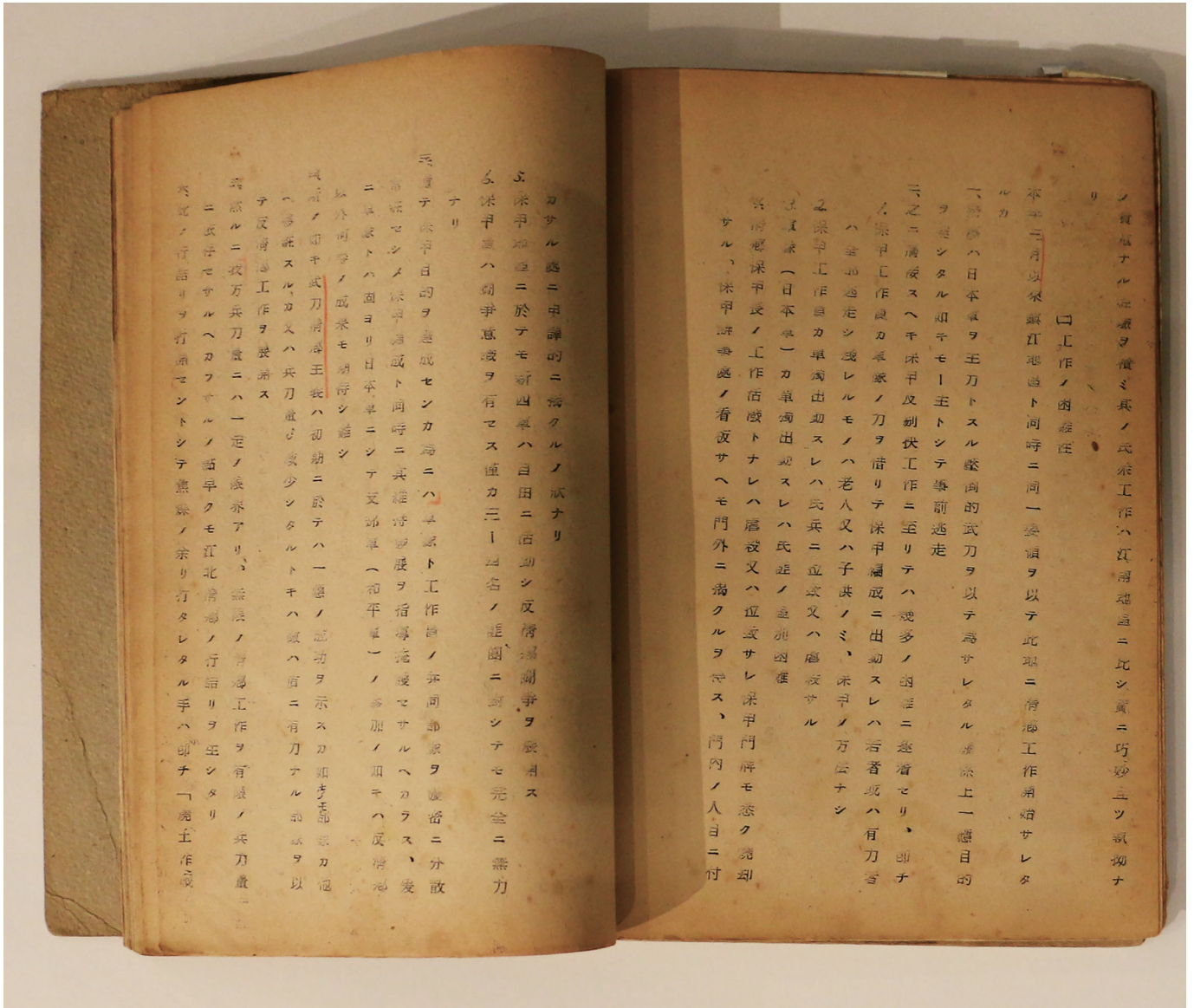
0079

「昭和17年度所要経費配当表」

(防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵 / アジア歴史資料センター公開 Ref. C15120584800)

備考に、「二、登戸研究所に限り、人件費は特技経費中より支弁し、製造関係経費は本表外とする」とある。登戸研究所の秘密戦兵器、偽札の製造に関する経費は別途支給されていた。

第2章 日本の対中国謀略



「昭和18年12月12日 中支二於ケル清郷工作ニ関スル調査報告書」
(渡辺賢二氏所蔵)

在北京情報課駐在員 大原実による極秘印の押された出張報告書。この見開きにある「(二) 工作の困難性」には「一、掃蕩は日本軍を主力とする圧倒的武力をもって為されたる関係上一応目的をなしたる如きも一主として〔人民は〕事前逃走」とあり、その対処のため、保甲*工作員や軍隊の力を借り、保甲編成のため出動しても「若者或いは有力者は全部逃走し残れるものは老人又は子供のみ、保甲の方法なし」且つ「保甲工作員が単独出動すれば民兵に拉致又は虐殺され」るなどと報告され、汪側、日本側が武力を行使しようとするほど返り討ちに遭い、占領地経営が機能していないことがわかる。

第3章 謀略最後の切り札 - 偽札工作



日本陸軍の経済謀略に使用された紙幣
上から、「軍用手票（軍票）」、
「中国聯合準備銀行券」、「中央儲備銀行券」
(当館所蔵)



登戸研究所製造
「六連偽札」原本
(当館所蔵 /
渡辺賢二氏寄贈)

裁断・ナンバリング前に
不良品としてはじかれたと
思われる、偽造
「中国交通銀行 10元券」。
戦後、
日本国内で発見された。

第3章 謀略最後の切り札 - 偽札工作



登戸研究所で製造された偽造法幣と同じ種類の「中央銀行 10 元券」と「中央銀行 5 元券」
 (上 2 種：トーマス・デ・ラ・ルー社製，
 下 2 種：ウォータールー・アンド・サンズ社製，
 10 元券 2 種：大島規弘氏所蔵，
 5 元券 2 種：当館所蔵)

券面中央部縦に絹繊維の「抄き込み」と、右側に孫文の横顔の「漉かし」が入っている。登戸研究所ではこの絹の「抄き込み」と「漉かし」が入った用紙に紙幣印刷することで、この種の偽造法幣を大量生産できるようになった。
 偽造法幣は大量に流通させる必要があったため、工作開始当時の最高額面 10 元券が偽札工作の中心的役割を果たし、5 元券は補助的であった。

その他 登戸研究所で製造していた偽造法幣と同じ種類の真券
 上から、「中国銀行 10 元券」，「中国銀行 5 元券」，「中国銀行 10 元券」
 (上・中：トーマス・デ・ラ・ルー社製，
 下：アメリカン・バンクノート・カンパニー社製 / すべて当館所蔵)

英国系のトーマス・デ・ラ・ルー社のものには絹繊維の「抄き込み」と天壇（中国の歴史的建造物）の「漉かし」が、米国系のアメリカン・バンクノート・カンパニー社製のものには直径 1 ミリ程度の丸型小紙片が全体的に散らされ、抄き込まれている。